

# 前田野目窯跡発掘調査概要

五所川原市教育委員会

1968年5月

## I はしがき

1967年春より夏にかけて、青森県五所川原市大字前田野目字鶴ノ沢28及び字砂田で発見された須恵器窯跡は、県内は勿論、大きく学界において注目されるにいたった。その要因は、矢張り須恵器窯跡の北限ということであり、学問的意義は大なるものがある。

市教育委員会においては、その重要性に鑑み、発見直後、慶應大学の江坂輝彌講師・弘前大学の村越潔講師そして北奥古代文化研究会の平山久夫氏・津軽考古学会の秋元省三氏などに現地視察を願い、須恵器の登窯であることを確認するにいたった。

そこで、古代窯跡研究家である立正大学の坂詰秀一講師を主査とし、前記4氏を加えて調査団を組織して発掘調査を施行する計画をたて、東京においての連絡は平山氏に頼してその実現の促進を願つたのである。

1968年5月2日より10日迄の9日間、立正大学及び弘前大学の考古学専攻学生、市内及び近接市町の高校生の協力を得て発掘を実施し、当初予期した通りの成果を挙げることが出来た。

よって、とりあえず発掘調査の概要を公けにし、近く出版する予定の報告書の刊行迄、しばらくその成果の既報としてここにプリントに付することにした。

## II 鶴ノ沢窯跡の概要

鶴ノ沢窯跡は、東南面する傾斜面に構築され、主軸をN-40度-Wに有する半地下式無段登窯である。全長9.25m、中央の焼成部巾2.15m、支口部巾2.25mを有している。ただ、運出し部の一部がすでに破壊されており原形は若干全長にプラスして考えなくてはならない。焼成部と燃焼部の境界は、明確に識別され、後者は前者より0.2m掘りくぼめられている。窯底勾配は、焼成部中央にて23度を算する。

窯の構築は、往時の地表面より平均0.4m掘り下げ、窯底と窯壁をそこに設け

天井は、地表上に露出していたものであり、煙出し部の煙道は、地表面近くに位置していたようである。

窯の構造は、底面は砂を致きつめ一部粘土を張つたものであるが、窯壁と天井部は、スサ入りの粘土をもって焼造し、壁面にて厚さ 0.5 m、天井部にて平均 0.4 m の厚さを有する。

壁面の状態は、焼成部及び天井部は、かなりの火度を受け青色に変化しているが、煙出し部周辺及び燃焼部は赤色を呈している。

燃焼部には多量の木炭を遺存していたが、木目の通らぬ粉末状のもの多く燃焼の状態が良好であったことを察せさせる。

出土遺物は、須恵器破片のみであつて総量 リング箱約 1 個分である。

須恵器は、長頸壺。甕。杯の 3 種が認められ、壺と杯はロクロ使用の痕跡が顕著である。また、甕は、外面にタタキ目が現われ、既して大形品の傾向が支配的である。杯の底部は、笠起しと糸切りと 2 種あり、ともに形態は瓶を一にする。

### Ⅲ 砂田窯跡の概要

砂田窯跡は、物ノ沢同様、東南面する丘陵斜面の中腹に位置し、主軸は、磁北より西に偏している。林道工事中、焚口部が破壊されているので完全ではないが窯底勾配 30 度の半地下式無段落窯の構造を有する現存長 5 m のものである。

燃焼部巾は 1.8 m、焼成部巾は、最大の部分にて 1.5 m を算する。窯の底面は、当時の地表面より 0.3 ~ 0.8 m 堀り下げたところに設けられ、スサ入り粘土をもって壁面を構築している。天井部はすべて窯中に落下して旧窓をどどめていないが、燃焼部付近においては、壁が若干アーチ形をえがいて残存していた。

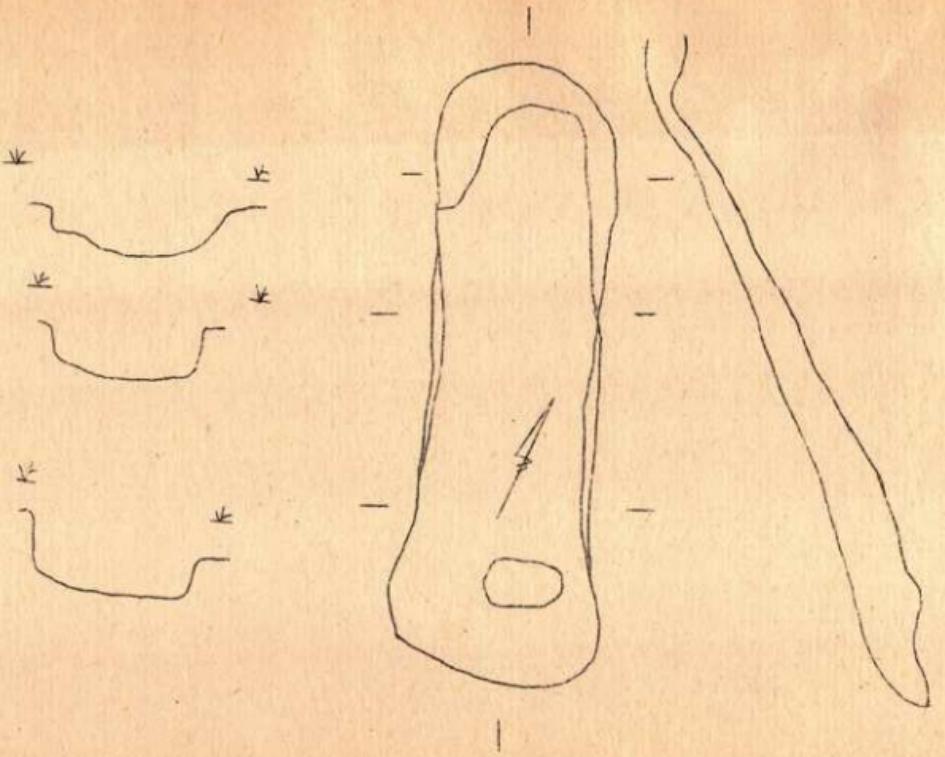
出土せる須恵器は、大形の甕。甕の類が多く、それに若干ではあるが杯を伴っていた。特徴は、物ノ沢出土品と瓶を一にしている。ただ、物ノ沢に比して、砂田の方が赤色の須恵器が多く認められたことは、砂田窯の方が操業期間中に若干のミスを犯していたことを示しているとも考えられる。

## 17 調査結果の収束

物ノ沢及び砂田の須恵器窯跡の概要は、以上のごとくであるが、それより明らかにされた事柄について概括しておく。

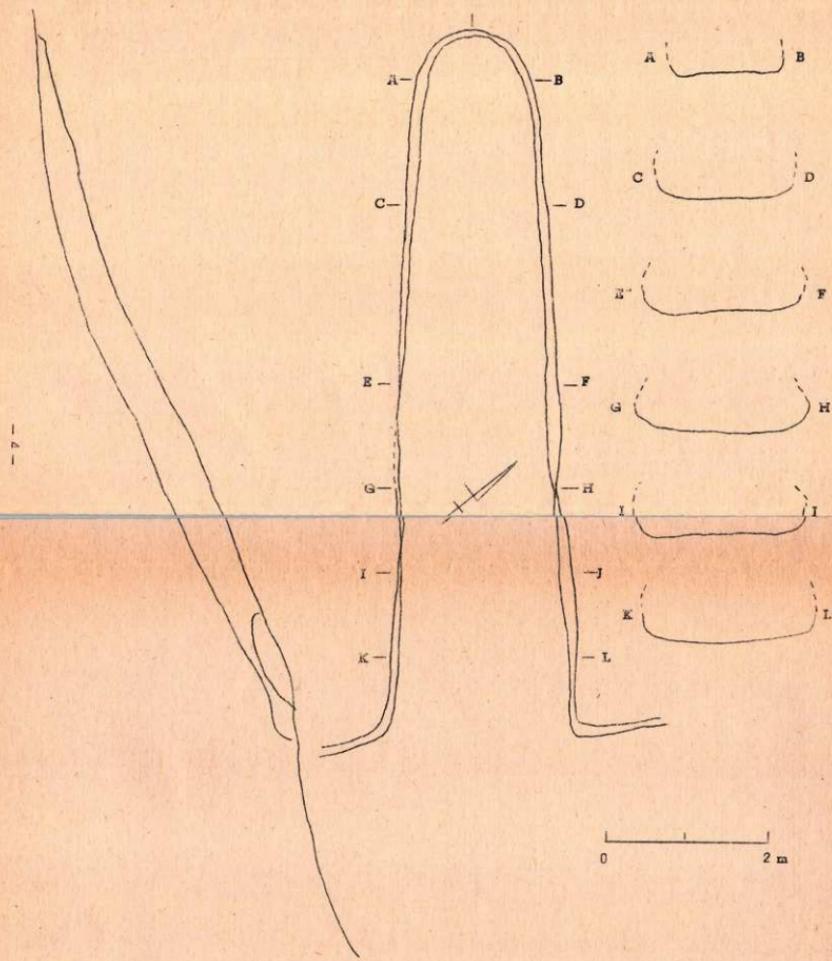
- ① 瓷の構造は、半地下式無段登窯の範囲に入るものであるが、東北地方全域に認められている一般的な須恵器窯と比較して、簡略化の傾向が現われる。このことは、本窯の築造時期が、かなり下降することを示している。
- ② 出土した須恵器は、壺・甕形の場合、京北臺灣の中世墳墓及び中世経家出土のものに近似例があり、中世の窯跡なることを示している。
- ③ 杯の底部には、荒起しと糸切りの2種の手法が混在して見出されたことは東北北部における須恵器の編年的研究を試みる場合注意さるべき実例を呈示した、というべきである。
- ④ 須恵器の大形壺の場合、赤褐色に近い色調を有するものが混じており、所謂常滑質のものに酷似する。このことは本窯が中世の所産であることを示す一端として把握されよう。
- ⑤ 物ノ沢並びに砂田の窯跡は、以上の諸点などより推考して中世～鎌倉時代に中心をおいて考えることが出来るのであり、ことによるとそれより若干下降する時期にまで入ることになるやも知れぬ。
- ⑥ 前田野目地域には、今回調査した以外にも谷に面する斜面より須恵器片の出土が知られているので、今後における調査によって、より多くの窯跡の存在が発見されることになるであろう。

(文責・坂詰)



砂田黒跡実測図

0 2 mm



黒ノ沢流域実測図